

デイヴィドソン「メタファーの意味するもの」

齊藤 渉

アメリカの哲学者デイヴィドソン(1917 -)による1978年の論文「メタファーの意味するもの」¹は、表題の示すとおり、メタファーの意味に関する先行理論を批判し、「メタファーは、語がその最もリテラルな解釈において意味することを意味しており、それ以上の何も意味しない」(31f./245)という明快なテーゼを打ち出している。

それは、言い換えれば、「<メタファーには、リテラルな意味ないし意義に加え、もう一つの意味ないし意義がある>という考え方」(32/246)への批判である。デイヴィドソンは、リテラルな意味を越えたメタフォリカルないし比喩的な意味という想定が、多様な形態をとりながら、古くはプラトン、アリストテレスに始まり、現代でもリチャーズ、ブラック、グッドマン、レイコフらに至る多くの論者に見られるという(32/246)。それに対して彼は、<語が何を意味するか>と<語が何をするために使用されるか>という区別を立て、メタファーは使用の領域にのみ属するという基本的スタンスを述べている(33/247)。

論文はこの後、先行する諸説の批判的検討に移る(33/247-43/256)。以下、彼の論点を順に追っていくことにしよう(各説の名称は報告者が便宜的につけている)。

(1) 類似説：メタファーがある類似性にわれわれの注意を向ける点から、メタファーがそのような類似性を意味し、「拡張された意味」をもつものとする。だがこの説だと、メタファーと新しい語彙の導入は区別がなくなってしまう。いずれにせよ、語の本来の意味はその語がメタファーとして使われる場合でも作用し続けることを考慮しなければならない(33/247-34/249)。

(2) 曖昧説 A：「メタファーの文脈において、ある語は新しい意味か本来の意味のどちらかをもつ。そしてメタファーのもつ力はこの2つの意味の間でわれわれが動揺する際の不確かさに依存している」(34f./249)。デイヴィドソンは、語の曖昧さは普通文脈に応じて決定され、メタファーの場合もそのような動揺は通常生じないとしてこの説を退けている。

(3) 曖昧説 B：上記の説を修正したものとして、実際に同じ語が同じ文脈において2つの意味をもつ事例、つまり、駄洒落や地口をモデルとする説明が考えられるが、駄洒落とメタファーは別物であり、説明としては機能しない(35/249f.)。

(4) 二重意味説：メタファーは同時にリテラルな意味とメタフォリカルな意味をもち、後者の場合、その語はリテラルな意味で適用可能な対象(a)以外の対象(b)にも適用され

¹ Donald Davidson: What metaphors mean, in: Critical Inquiry, vol. 5 (1978), pp.31-47, also in: D. Davidson: Inquiries into truth and interpretation. Oxford: Clarendon Press 1984, pp.245-264. 以下、参照箇所をあげる際は、それぞれのページ数をカッコに入れて、(31/245)のように示す。[付記: デイヴィドソンは、本稿脱稿後の2003年8月30日に死去した]

る。当然、ある語が(a)と(b)のどちらに適用されるのかを示す規則が必要となる。デイヴィドソンは、この説が、フレーゲによる様相命題(「必然的に~である」など)や命題的態度(「~と思う・信じる」,「~ということを望む」など)の理論と似ていることを指摘する。しかしこの議論も、類似説と同様、メタフォリカルな意味がその語の新しい意味の導入と区別できなくなってしまうという欠点をもつ(35/250-38/253)。

(5) 直喩説: メタファー("Christ was a chronometer.")のもつ比喩的意味が、それに対応する直喩("Christ was *like* a chronometer.")の字義的意味と同じだと考える。だが、対応する直喩が容易に見つからず、見つかったとしても妥当性が疑わしいようなメタファーもあることを考えると、この説の妥当性には問題がある(38/253)。

(6) 省略直喩説: この説は、メタファーが省略された直喩であると考え。(5)と(6)に共通する問題点は、いわゆる「メタファーの隠された意味」なるものが、あまりにも明白なもの(直喩の字義的意味=あるものがあるものに似ていることの言明)になってしまう点である(38/253-40/256)。

先行理論の批判、とりわけデイヴィドソンにとって主要な批判対象であったと思われるブラックの相互作用説への批判はまだこの後に続くが、以上の議論を受けて、デイヴィドソンは自説の提示に移る。その前提は、冒頭のテーゼにもあったように、メタファーの意味が語のリテラルな意味にもとづいて説明されなければならないという点にある(41/256f.)。その場合、比喩的意味なるものを持ち出さずに、メタファーを通常の真理条件のもとに考察することが可能となる。「直喩とメタファーの間にある最も明白な意味論的差異は、すべての直喩が真で、たいていのメタファーが偽だということである」(41/257)。ただし、ここで重要なのはメタフォリカルな命題の現実に偽であるということではなく、偽だと見なされることである。したがって、「一般に、ある命題が偽だと見なされる場合にのみ、われわれはその命題をメタファーとして受け入れる」(42/258)。これと関連してデイヴィドソンは、同じ命題がメタファーとしても嘘としても使用できる例をあげている。つまり、ある命題がメタファーであるか嘘であるかを決めるのは、その命題の意味(同じ命題であるならそれは同じ意味をもつ)ではなく、その命題の使用だと彼は考える(42f./258f.)。

デイヴィドソンはこのことを確認した上で、さらに(7)認知心理学的立場から提出された「ファジーな意味」説とブラックによる(8)相互作用説(interaction theory)を批判している(43/259-45/261)。後者によれば、「人間は狼である」の場合、メタフォリカルに使用された「狼」という語のもつステレオタイプの属性が、主語となる「人間」に適用される。だが、このようにして付加される「特別な認知的内容」も、デイヴィドソンの批判する「メタフォリカルな意味」という考え方のヴァリエーションにすぎない(46/262)。

だが、メタフォリカルな意味による説明はそもそもなぜ問題なのか? 「われわれは、『メタファーが何らかのメッセージを伝えている』とか『メタファーには何らかの内容ないし意味がある(リテラルな意味はもちろん除いて)』という考え方を捨てなければならない。われ

われが上で考察してきた諸説は自分の目的を取り違えている。[メタファーの暗号化された内容を解読する方法を提供しようとするとき、これらの説はたしかにメタファーがわれわれにおよぼす影響を説明してくれる(あるいは説明しようとする)。それらに共通する誤りは、メタファーの喚起する思考内容に固執し、これらの内容をメタファー自身の中に読み込んでしまうという点である](45/261)。

換言すれば、「人間は狼である」というメタファーの意味は、「人間は狼のようだ」ということでも「人間は(狼のように)擻猛だ」ということでもなく、端的に「人間は狼である」ということ、そしてそのことのみである。メタファー(に対する解釈)の結果にすぎないものをメタファーの作用する原因と混同してはならない、ということが彼の主張の眼目であろう。この主張を補足する形で、論文末尾ではメタファーのパラフレイズの本質的困難に触れ、メタファーの示唆する内容が、有限なものではなく、命題の形で述べられるとも限らないことを論じている(46/262-47/264)。

以上見てきたとおり、デイヴィドソンの主張は明快であるが、この主張を堅持するかぎり、メタファーについては個々の事例に即した分析しかできなくなり、例えば、なぜ特定のタイプのメタファーが(言語の境界を越えて)繰り返し現われるのかなどという疑問はうまく扱えなくなるか、せいぜい副次的な問題にしかならないように思われる。当然、彼の議論の進め方は、彼の哲学的立場とも深くかかわっており、そのことを考慮して読まれる必要があるだろう。